

ベッドから見える場所には他に誰もいなかった。

自分を拘束している男と二人きりという状況だというのに、春海には驚く程危機感というものが無かった。相手がヤマトだから安心しているというわけではない。むしろ、ヤマトならばもう仕方がないと思っている。

「きみが俺を殺すの？」

「私がかきみを？」

彼は少し首を傾げて春海を見つめた。その態度から殺意や悪意は窺えず、それが逆に不思議だった。

「違うの？」

「きみは丸一日以上眠っていたわけだが、空腹ではないか？」

春海の問いかけには答えずにヤマトが訊いてくる。

「今はあまりお腹空いたとか感じないかな。足、手当てしてくれたのはヤマトだね？　ありがとう」

布団を掛けられていて見えないけれど、挫いた左の足首には湿布を貼られたような心地良い冷たさを感じる。

「湿布を変えてやろう。起きられるか？」

「これを外してくれたらね」

少し考えこむように口元に指をあて、ヤマトは左手首に繋がっていた鎖だけを外した。右手足に嵌められた銀色の輪はそのままだ。身体をずらして床に足を下ろした

瞬間に足首が痛んだ。

「その足では逃げられまい」

春海の顔色を読んだかのようにヤマトが言う。

「足ってどうか、服が無いら？」

寝ている間は気づかなかったがいつのまにか下着以外全て脱がされていた。逃げられないようにする為か、怪我が無いのを確かめる為か、それとも他に理由があるのかは判らない。

「必要なものはおいおい用意しよう。まずは足を出したまえ」

湿布などを手にしたヤマトに言われてベッドの端に座ったまま左足を突きだした。足元に屈みこんだヤマトが先程までと同じように捻った足を手当てしていく。慣れているわけではなさそうだが手際は良い。

手足の拘束具さえ目に入らなければ本当にヤマトはただ自分を保護しようとしているのではないかと錯覚しそ
うだった。

「ヤマト」

「何だ？」

テーピングを巻く手を止めずに短い答えだけ返してきたヤマトに問いかける。

「何の為に俺をここに連れてきたんだ？」

ヤマトは今度はすぐに返事をしなかった。手当てを終えても抱えたままの足をじっと見据えている。やがて彼が動いた。

「あの、何してるの？」

足首を持つ手を少し上げ、寄せた唇で向こう脛に触れている。唇は冷たくて、それなのに触れられた場所から熱くなる。脚から全身にぞわりと鳥肌が広がった。

「ようやくきみを手に入れた」

逃げだしたいとこの時初めて春海は思った。けれど指の一本も動かせない。

「……ずっと、一緒にいたじゃないか」

あの日から春海はヤマトの側にいた。新たな支配者の右腕として、ヤマトに最も近い人間は自分だったはずだ。手に入れるものにも春海は他の全ての誘いを断ってヤマトの手を取ったのだ。

自分で手当てをした足首を撫でながらヤマトが言う。

「これのおかげで予定より早く事が運んだ。本来はきみが九条達と合流してからにする予定だったが……」

はっとしてヤマトにまた訊ねる。

「俺があいつらのところに行こうとしてた事、知ってたのか」

「きみがジプスを出て頼れる相手はそれなりにいるだろ

うが、無償できみを助けるのは奴らぐらいだろうし、ジプスと敵対するつもりが無いならそれ以外の選択肢も無いはずだ。最後にターミナルを使い大阪本局から出ていったのも奴らの所へ行く為だろう？」

「そのとおりだ。何だ、全部お見通し……そうすると予想して仕組んでたんだな」

そして見逃せない事実にも気がつく。イオ達の組織は確かにジプスと比べれば小規模なものだが全く武装していないわけではない。ジプスと協力して悪魔を討伐した事もある。路上ではなくそこへ辿りついてから春海を狙うのはリスクが大きいはずだ。

「まさかもあいつらの所にも何かしたんじや」

ヤマトがそうするつもりだったというならそれなりの理由があるはずだ。

「人員は送りこんであつたが使う場面は無くなった。本当は奴らの目の前できみが死んだ事にしてしまえば一番良かったのだが、歩けない怪我を放っておいたら敵も多い中で無事に辿りつけたかも判らないからな」

「俺を死んだ事に？」

「きみに好意を持っているジプス外の人間という意味で新田達は証人として最適だ。だがその必要は無くなった。

安心しろ、九条の組織は今やジプスの良き友だ。間諜は